

氏名	デュラン ステファン アイソル
ヨミガナ	デュラン ステファン アイソル
学位の種類	博士(音楽学)
学位記番号	博音第344号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 日本の真言声明に於ける梵讃の研究:口伝書とアクセントの分析を中心に

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	塚原 康子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	植村 幸生
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	杉本 和寛
(副査)	東京藝術大学	非常勤講師	(音楽研究科)	近藤 静乃
(副査)	洗足学園音楽大学	客員教授		澤田 篤子

(論文内容の要旨)

本論文では、日本の真言声明における梵讃の研究を進める第一歩として、口伝書の現代語訳、アクセントの分析、歴史的な読解を行い、梵讃の旋律作成方法や歴史的な変遷について論じる。

第1章では、日本の梵讃の研究に必要とされる悉曇学概念をまとめ、幾つかの点を明らかにする。安然、明覚、信範、澄禅の四人の悉曇学者が書いた文書を中心にまとめ、特に「連声」概念に注目する。『魚山叢芥集』から幾つかの声明曲の実例を参照しながら、この「連声」という概念が、音節の音量と関連を持つのと同時に、声明の旋律型にも深い関係を持つことを証明する。この音節の音量と旋律型との間の相互関係は、サーマ・ヴェーダのマトラ理論にも現れるとともに、悉曇学の音韻分類にはマトラ理論に共通しているところが多いことを示す。サーマ・ヴェーダのマトラ理論は後の時代のヒンドゥー教の音楽に影響を与えたので、仏教音楽に現れることは当然であると論じる。

第2章では、応永2年(1395)に最初に書かれた『声實抄』、文明期(1469~1487)に書かれた『声明集聞書』、明応5年(1496)に書かれた『声明口伝』、応永2年(1395)と応永20年(1413)の間に成立した『声明集私案記』の四つの書物と、『魚山叢芥集』に出てくる梵讃の全て、すなわち《四智讃》・《大日讃》・《不動讃》・《仏讃》・《東方讃》・《南方讃》・《西方讃》・《北方讃》・《吉慶讃》・《四波羅蜜讃》・《阿弥陀讃》の全11曲を対象として、四つの段階からなる分析を行う。最初に各梵讃の出典と歴史をまとめ、次に各梵讃の唱え方を記した真言声明の口伝書とそれらの所在を取りまとめる。そして、口伝書の中の梵讃の唱え方に関する部分を書き下し、現行日本語に翻訳する。最後に、梵讃の詞章の音韻構造と旋律の動きの間の相互関係を分析する。三重母音、二重母音、二重子音、ヴィサルガ、アヌスヴァーラの五つの特徴のいずれかを持つ音節をグル音節として分類し、古典サンスクリットの強勢アクセント規則を元にして、梵讃の詞章のアクセントの分析を行う。博士を延長しているもの、延長していないものの二つの種類に分け、延長しているものに該当する音節の音韻構造を分析する。サンスクリットの音韻構造が梵讃の旋律の動きと深い関係を持つことを明らかにし、日本の梵讃には古いインド音楽の旋律型が残されていることを解明する。

最後に、第3章では、アジア大陸における仏教音楽の歴史を簡単にまとめ、日本の梵讃との接点を探り、梵讃の伝来について、仮説を提示する。1世紀~5世紀までの仏教音楽、特に大乘仏教音楽は、ヒンドゥー教音楽とほぼ同じものであったことを前提とし、両方がヴェーダの詠唱方法から伝わったことを述べる。この時期のヒンドゥー教では、Minor Gandharvic Formsという四つの曲種が使用され、これらを、ヴェーダ儀式の三つの曲種分類と比較した上で、前者は後者から伝わったことを論じる。Minor Gandharvic Formsでいうリグとガーターは、ヴェーダ儀式における同名曲種、リグとガーターから来ており、残るMinor Gandharvic Formsのパニーカーとブラフマギータは、ヴェーダ儀式のサーマンから来たのではないかと思

われる。この曲種分類は、慧皎（497～554）の『高僧伝』にも見られ、リグとガーター、それぞれが『高僧伝』でいう転読と唱導に該当し、ブラフマギターとパーニカー、それぞれが『高僧伝』でいう「梵」と「唄」に該当するのではないかと推論する。日本の梵讃は、『高僧伝』でいう「梵」に該当していると思われるが、この曲種の唱え方は、中国では一旦途絶えてしまったため、中国の唐代に、インドから再び伝来し、この曲種類は、義浄（635～713）という中国の僧侶が書いた『南海寄帰内法伝』と日本の僧侶、円仁の『入唐求法巡礼行記』に現れる。

更に、第3章では、梵讃の大陸的なルーツを探るには、チベット仏教音楽の口伝も非常に重要であることを論じる。仏教は、7世紀頃初めてチベットに伝えられ、この時にインドの仏教音楽も伝来したため、義浄と円仁が説明したインド式の仏教音楽と同じものであったのではないかと述べる。チベット仏教音楽の最古の口伝書、サキヤ・パンディタ（1182～1251）によって書かれた13世紀に成立した『楽論』を使い、日本の梵讃の作成方法との関連を述べる。梵讃の作成方法と『楽論』におけるチベットの仏教音楽の作成方法との間の共通点は四つあり、それらは、曲種分類、旋律型の音韻規則、性別による曲の分類方法、比喻による旋律型の説明である、と論じる。これらの共通点は、インドに由来する可能性が高いことを指摘し、日本の梵讃は、インドのブラフマギターに由来すると推測する。その上で、日本の梵讃が古代インドの音楽要素を残している点で、世界音楽史においてきわめて重要であることを強調したい。日本の音楽文化として守られている梵讃の保存と、さらなる研究発展の必要性を提示する。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、日本の真言声明に伝わる梵讃（梵語讃）を対象に、関連する声明口伝書の読解と、復元したサンスクリット（梵語）原文の音韻構造と博士に見られる旋律型との相関関係の分析・検証を行った上で、古代インド発祥の仏教音楽と日本に伝存する梵讃との歴史的接点を仮説的に論じた研究である。

本論は全3章から構成される。第1章では、伝統的な悉曇学と近年の声明研究を辿り、悉曇学の「連声」概念がサーマ・ヴェーダのマトラ理論と共通し、サンスクリットの音節量と声明の旋律型とが深く関連することを示した。核心となる第2章では、『魚山薑芥集』所載の梵讃11曲について、梵讃ごとに典拠と歴史をまとめ、14～15世紀に成立した四つの口伝書から各梵讃に関連する部分を翻刻し現代語訳した後、漢字音写された詞章から復元したサンスクリット原文のアクセント・音節量と博士に示された旋律型とを表にして対応関係を分析した。第3章では、6世紀中国の慧皎『高僧伝』、9世紀の円仁『入唐求法巡礼行記』、13世紀チベットのサキヤ・パンディタ『楽論』などの記述から、古代インド・中国・チベット・日本の仏教音楽の分類体系には共通性が見られることを明らかにし、現行の日本の梵讃の起源は仏教音楽が中国化された唐代に再びインドから伝来した「梵」に相当すると推論した。

本論文の成果は、第一に、これまでの声明研究では漢語讃の研究はあっても梵讃の研究はほぼ皆無であった中、初めて梵讃を対象に独創的な手法によってサンスクリットの音韻と博士との関連について説得力をもつ分析を行ったことである。両者の関連性の違いから11曲の梵讃を三グループに分類した点、難解な口伝書を丁寧に読み解き当時の梵讃の歌唱実態を明らかにした点も重要である。ただし、口伝書の翻刻・解読の凡例、サンスクリットのアクセント概念に対する詳細な説明、旋律型などの用語の定義は付加される必要があり、復元したサンスクリットの音節と漢字音写との対応の不統一や誤植も適切な修正を要する。また、とくに第3章は粗削りな箇所が見られ、今後の精緻な論証が待たれる。

しかし、総合的に見れば、米国での大学時代に1967年公開のカウフマン論文に出会って感銘を受け、「日本の梵讃には古いインド音楽の音楽要素が残されている」という命題と取り組むために日本語と仏教を学び始め、来日後も研究のために古文漢文・サンスクリット・チベット語を学びつつ膨大な声明史料と日々向き合い真摯に研究を進めてきた申請者の姿勢には、知的探究行為としての研究の本旨を見る思いがする。日本の声明を世界音楽史に位置付ける本研究の意義を高く評価し、合格と判断する。